

## 論文

## アメリカ帰りのメディア議員

— 関和知の留学経験と排日運動 —

河崎吉紀<sup>†</sup>

要約：本稿は20世紀初頭、アメリカで学位を取り、1910年代、20年代に衆議院で活躍したジャーナリストである関和知を例に、排日問題に取り組む政治家の活動、思想を明らかにするものである。学資の不足から留学先で働くことを余儀なくされ、彼はアメリカ社会のさまざまな階層を間近に見た。帰国後は『万朝報』『東京毎日新聞』で記者を勤め、1909年に衆議院議員となった。排日土地法案に対抗して中野武蔵と相談会を催し、第18回列国議会同盟会議では、アメリカの代議士たちと日米部会を結成するなど、具体的な政治活動を展開した。日米両国民の感情の行き違いに焦点を合わせ、互いの理解を深めることが最善であると訴えた。

キーワード：プリンストン大学、列国議会同盟、ウッドロウ・ウィルソン

## 目次

1. はじめに
2. アメリカ留学
  - 2-1. 未来の国務大臣たる準備を為す
  - 2-2. 『万朝報』『東京毎日新聞』の記者
3. 排日運動と衆議院議員
  - 3-1. カリフォルニア州外国人土地法
  - 3-2. オランダのハーグへ
  - 3-3. 第18回列国議会同盟会議
  - 3-4. ウッドロウ・ウィルソン『新自由主義』
  - 3-5. 十四カ条の平和原則
  - 3-6. 世界的市民としての修養と教育
4. おわりに

## 1. はじめに

本稿の目的は、衆議院議員・関和知を例に、海外経験をもつメディア議員が渡航先でどのような経験を積み、帰国後の政治活動においてどのような成果を還元したのかを明

<sup>†</sup>同志社大学社会学部教授

\*2022年5月11日受付、2022年7月8日掲載決定

らかにすることである。

藤岡紫朗『歩みの跡——北米大陸日本人開拓物語』は彼を次のように紹介する。

シアトルの「北米時事」に筆を執った関和知君は、早稲田専門学校（早大の前身）政治科出身、渡米前すでに「報知新聞」の記者として政治面を担当し諤々の政論を発表していた。人物が至って堅実で常に国家人民を憂い、熱誠な政治家であった。千葉県から議員に当選し、初め国民党に投じ、犬養総裁の股肱の一人に数えられていた。弁舌に長じ、文章にも秀で、その上操守堅固、珍しい若手の政客であったが、惜しいことに比較的早世された<sup>(1)</sup>。

このように西海岸の移民史において、関和知は新聞記者として記憶され、のちに政治家となったアメリカ帰りの国会議員である。

こうした海外経験をもつメディア議員については、すでに本田毅彦による詳細な分析がある。そこでは、渡航先のメディアに勤めた人々から、特派員として渡米する人々への世代的な変遷が指摘されている。前者について本田は「民主主義の国、輿論の国であるアメリカでメディア活動を体験することによって、その知見を日本の政界に環流させた人々」と記している<sup>(2)</sup>。

実際、関和知は帰国後、閥族打破を掲げて政党政治の確立に努め、一貫して普通選挙の実施を主張した。のみならず、日米関係の改善に向けて具体的な政治活動を行い、在米日本人からも注目を集めていく。その焦点はアメリカの排日問題にあった。

1906（明治39）年4月に起きたサンフランシスコ地震により、市学務局は教室が足りないとの理由で、日本人生徒を公立学校へ通学させない決議を行った。セオドア・ルーズベルト大統領はこの決議を撤回させたが、日本人への排斥運動は収まらなかった。こうした事態を受け、西園寺公望内閣は駐日米国大使とのあいだに日米紳士協定を結ぶ。日本は新たな移民を送らないと約束し、アメリカに差別的立法を行わないよう求めた。しかし、問題はくすぶり続け、1913年のカリフォルニア州排日土地法によって再燃する。これは帰化できない外国人の土地所有を禁止するものであった。

こうしたなか第一次世界大戦が勃発、1918（大正7）年に終結すると、翌年、パリ講和会議が開かれる。日本は西園寺公望、牧野伸顕らを派遣するが、積極的な発言に乏しく、野党やマスメディアはその存在感のなさを批判した。とりわけ、アメリカにおける排日問題を視野に入れ、日本が主導した人種的差別撤廃の提案は強硬な反対にあって退けられた。その後、1922年にアメリカ最高裁判所が日本人の帰化権を否認、1924年には排日移民法が成立して、日本からアメリカへの移民は完全に遮断される。

こうした歴史については、移民史はもとより、若槻泰雄『排日の歴史——アメリカにおける日本人移民』をはじめ<sup>(3)</sup>、箕原俊洋『アメリカの排日運動と日米関係——「排日移民法」はなぜ成立したか』など、国際政治学において詳細な研究が蓄積されている。

排日移民法の成立について、箕原は「近代日本の多くの親米派知識人がその信念の基礎を全面的にアメリカの理想主義への共感に置いていたからこそ、彼らの失望はとりわけ大きかった」と記している<sup>(4)</sup>。関和知もその一人であったろう。

また、メディア学との関連でいえば、日本のマスメディアが排日移民法を強硬な姿勢で報じた点について、玉井清研究会が詳細な分析を残している<sup>(5)</sup>。同研究会は雑誌についても調査を行い、対米感情の悪化を煽るだけでなく、理性的な対応を堅持すべきとの論調も多数含まれていたことを指摘する。ほかに松尾理也が『大阪時事新報』における報道を分析している<sup>(6)</sup>。同紙は高級紙を自任することで世論の憤激をもてあまし、良識ある大統領が拒否権を発動するだろうとの予想を外して信用を失墜させた。大阪という地理的な条件は情報の正確さという点で不利であったが、一方で記事にはわかりやすさや庶民性が表れていた。また、過去に遡れば、日露戦争前後の報道について片山慶隆が明らかにしている<sup>(7)</sup>。情報源をもつ『国民新聞』や『万朝報』を除き、イギリスやロシア、韓国に比べて、かつてアメリカに関する報道は少なかった。新聞論調はアメリカを大国として警戒しつつも、好意的に論じていた時代もあった。

このように、国際政治学から見た日米関係や日本におけるメディア論調について、いくつかの重要な研究が行われてきた。しかし、アメリカ帰りの衆議院議員が排日問題においてどのような政治活動を展開したのかについては、十分な研究が行われてきたとはいえない。そこで、本稿は関和知を例に、日米関係の一端を議員レベルにおいて解明することを目指す。

もっとも、議員外交の歴史については、すでに伊東かおりによる詳細な分析が存在し、『議員外交の世紀』としてまとめられている<sup>(8)</sup>。列国議会同盟への参加を、対外硬派など国民主義に基づく外交の延長上に位置づけ、また、排日運動を改善する手段として、日米の議員団が関係を構築する過程を明らかにした。多国間議員外交の日本における受容を解明した貴重な研究である。

関和知は列国議会同盟の第18回総会へ出席した。そこへ至る過程として、まずは彼の留学経験をたどりたい。東京専門学校を卒業後、郷里へ戻り、改進黨系の先達に助力を得ながら雑誌『新総房』を立ち上げ、それを日刊紙へ発展させることに成功した関和知は、次なる飛躍を求めて太平洋を渡る。20世紀初頭、政治家を志す新聞記者はアメリカになんを見つけたのか。次章では、渡米までの経緯や、帰国後の活動を含め、関和知が国政へ進出するまでの過程を明らかにしよう。

## 2. アメリカ留学

### 2-1. 未来の国務大臣たる準備を為す

1900年（明治33）頃から関和知は渡米の機会をうかがうようになった。元貴族院議員五十嵐敬止が彼の前途を心配し、田舎で新聞を発行するのもよいが、将来に向けて雄飛せよと勧めていた。そこで、関和知は新聞を仲間に任せ、再び上京して東京英語専修学校へ入学した。この学校は立教学院の分校で、関和知はここで元田作之進、アーサー・ロイドから英語を学んだ。高山孝之助が後任として『新総房』の主筆を任された。関和知は上京後も志賀吾郷など同志と頻繁に交流を重ね、自身もしばしば帰郷して梅松別荘に会合をもった。

1902（明治35）年4月16日、梅松別荘にて関和知の送別会が開かれた。成田山の石川照勤が三和弥三郎を介して彼に若干の餞別を贈っている<sup>(9)</sup>。翌17日に関和知は志賀吾郷とともに東京へ向かい、志賀は関和知の家に滞在した。2人は18日に四宮有信の病気を見舞い、また、山田烈盛を『新総房』の主幹に迎えようと訪ねている。5月3日の午後5時、早稲田関係者が麴町区の富士見軒に集まり、関和知と人見潤之助の送別会を開いてくれた。渡辺亨が发起人として挨拶し、講師の杉田金之助が彼らに要望を述べ、その後は午後9時まで笑いに満ちた歓談のひとつときをすごす。吉田銀治、藤代市之輔ら、千葉県改進黨系の面々も参加し別れを惜しんだ。こうして彼は5月20日、土佐丸にて日本を離れた。

1902（明治35）年6月9日午前11時、関和知はシカゴに到着した。繁華街は彼の想像をはるかに超えていた。8月27日、浅井蒼介、宇佐美佑申、太田茂宛に手紙を書いた<sup>(10)</sup>。田村昌宗翁をはじめ、同志諸君、ご健勝のことと思う。千葉のみなさんも手紙を送ってくださいと記されていた。宛先はニューヨークのブルックリン、コンコードストリート17番地であった。心配をかけないように、家族にも絵葉書などをたびたび送ったという<sup>(11)</sup>。

浦辺襄夫ら『新総房』の関係者もしばしば関和知へ便りを送った。宇佐美佑申は、『新総房』はもちろん『太陽』などの雑誌も送った。「風のまに〜太平洋を漂ひさて大陸の三千里を、飛脚屋の足下とほ〜」と、関和知はこれら日本からの便りを待ちわびた<sup>(12)</sup>。佐瀬熹六から『新総房』が届く。販路が拡張されたと記されていた。関和知は返事をしたため、新聞の発展を喜ぶとともに、「新総房は只売る為めに多く売る為めに起りたる新聞に非ず」と書いて商業主義に走ることを戒めた<sup>(13)</sup>。

年が明けて1903（明治36）年元旦、関和知は生まれて初めて門松や雑煮のない正月を迎えた。その日の朝食もコーヒーやミルク、パンが並び、無趣味なことと感じた。ア

アメリカでの数ヶ月を振り返り、彼は「赤切符を手にする田舎漢が、誤つて上等室に乗り込みたるの感に似たり」と記している<sup>(14)</sup>。美しく珍しい物に心を奪われているうち、気がついたら他の駅に来ていたように瞬く間に正月を迎えたという。

昨年末、1902（明治35）年12月28日に衆議院が解散していた。関和知は手紙のなかで、憲政本党の千葉県における選挙戦を気遣っている。皆が選挙を戦っているのに、アメリカの風物などを語ってよいはずがないと思った<sup>(15)</sup>。関和知が解散を知ったのは元日の午後3時だった。アメリカの新聞には日本の議会など数行の記事も載っていなかった。

関和知はイエール大学に入る前、予備教育としてニュージャージー州のサウスオレンジで高校に1年半ほど通っている。目的は語学力をつけるためである。ニューヨークから通学した。もちろん、日本人は関和知しかいなかった。「学校の教師や学生は、物珍らしく思つて交際して呉れたが、何しろ私は遠慮勝の人間で、殊に会話が下手と来て居るので、多数の学生に意思を通ずる事が不便であつた、特に親友を得る事が大困難であつた」と当時を振り返っている<sup>(16)</sup>。そのうち女子生徒のヴンダビアが英語を教えてくれるようになった。後年、列国議会同盟の会議に出席した折、帰りにアメリカへ立ち寄った関和知は、この高校を訪問した。校長に頼まれ、生徒に話をする機会をもった。そのとき、かつて親しく接してくれたヴンダビアの妹が、声をかけてくれたという。

また、ハワード・マチャーという16歳くらいの少年と友人になった。彼も親切にしてくれた。「私の片言交の会話の心持を能く理解して呉れ、日曜日などは他の同窓と遊ばないで、反つて異郷の私と共に野に山に遊んで、大に私を慰藉して呉れた」という<sup>(17)</sup>。面白く快活な人物であった。関和知は折に触れて、マチャーの家へ遊びに行きご馳走にもなった。日本へ帰国するとき、マチャーは50ドルを餞別としてもたせてくれた。また、関和知がアメリカを訪れたとき、彼に再会してサウスオレンジ周辺をドライブし旧交を温めた。

関和知は生活費を稼ぐため、働かねばならなかった。支援者の五十嵐敬止が事業に失敗し、仕送りが途絶えたからである。商店の店番やレストランの給仕、看板書きの手伝いもやった。とにかくよく働いた。手紙を書く暇もなかった。「此地の民情風俗等に付ては近来追々通曉致し」と現地にもなじんできた<sup>(18)</sup>。アメリカに到着したとき、三分刈りのイガグリ頭でいかにも東洋の豪傑風であった関和知も、髪の毛が短いのが気恥ずかしくなり、また、人からも相手にされにくいように感じて、髪の毛の長さを二寸ほど伸ばした。アメリカ化してきたと周囲には褒められた。

1903（明治36）年、関和知はイエール大学に入り、その模様を日本へ伝えるようになる。たとえば、学生が社交界へデビューするカレッジの2年生について、30年前から開かれてきたイベントであるとし、「学生各其未来のワイフ（妻君）若くは婦人の朋

友を率ひ、音楽会、及舞踏会を開き」と記している<sup>(19)</sup>。彼らの多くは富豪の子弟だった。当日のニューヘイブンは流行の服装で埋め尽くされた。学生たちはシルクハットと燕尾服の紳士となり、800人の青年男女が舞踏会で踊った。彼らは豪華さを競いそれを名誉にしていた。「是遂に人間界なるかを疑はしむるものありき」と関和知は目を見張っている<sup>(20)</sup>。

ニューヨークの寒暖は関和知にとって厳しく感じられた。気温は氷点下10度まで下がり、粉雪が舞うといえは趣もあるが、大気中の水分がそのまま凍ってしまうような日が続いた。急に暖かくなったかと思えば、たちまち風が吹いて曇り空になる。このような冬は想定外だった。「全身を氷漬にせらるゝと云ふの形容当れるに如かず」と書き残している。とはいえ、部屋にあっては快適で、場合によっては上着が暑苦しくなるほどである。彼は「物質的文明」のありがたさを感じていた。

食事はなかなか慣れなかった。「到底日本に於ける如き的美を望む可らず」と書いて、アメリカの食文化に閉口している<sup>(21)</sup>。鶏肉もだめで、牛肉は良いものがあるが、常磐のロース鍋にはかなわない。「何処迄も故郷は詩的なる哉」とため息をついた。大麦のひしゃげたものを砕いて、砂糖と牛乳を入れて炊いたものをオートミールと紹介し、「余には又なく口に適し、旨きと限り無し」とこれは関和知に認められた。それ以来、朝食はオートミールである。酒についてはビールやウイスキー、ワインも試したが、「日本酒にして始めて真に酒なるを知る」と述べて物足りなさを語っている<sup>(22)</sup>。酒から遠ざかると元来、甘党ではない彼も、紅茶に砂糖を入れて飲むようになった。食卓に菓子や果物がよく出るので、しだいに甘いものに慣れてきたのだという。

周囲は関和知が医学や工学、理学を学びに来たと誤解した。理系のいずれを学んでいるのかとよく尋ねられた。「政治経済の学を修めて未来の国务大臣たる準備を為すに在り」と答えたが、それはやや勇気のいることであった<sup>(23)</sup>。海外に出て日本の議会や総選挙が内輪もめのように感じられた。いかに日本の文明が幼稚で国力が微弱であるかを思い知った。欧米は一等国として確立している。忸怩たる思いだった。「我国の政府政党何ぞ其不見識の甚しきや彼等は畢竟世界に対する日本国の存在の理由をだに解せざる者には非ずや嘆はしきの限りに候」と故国の現状を嘆いた<sup>(24)</sup>。

そして、アメリカ大統領の、平民的で庶民に親しく接している姿に驚きを隠せなかった。セオドア・ルーズベルトが中部を訪問したとき、彼を乗せた列車が駅を通過するに際して、人々は手を上げて喜びを表した。あまりの混雑で駅員に迷惑がかかるため、「大統領は其駅の危難を救ふがために車上より一場の演説を余儀なくせしめられ、地方人民をして充分の満足を与へたり」と関和知は伝えている<sup>(25)</sup>。後年、大隈重信が地方遊説で行った車上演説を彷彿とさせる。関和知が大隈伯後援会に近いことを思えば<sup>(26)</sup>、あるいは彼からアメリカの事例を大隈へ伝えたのかもしれない。また、大統領

が小学校に立ち寄り、親しく国民と接することを知って、関和知は日本の教育に思いをはせる。「勅語を以て經典となし、御真影の前へに叩頭することを教へて、以て国民教育の能事完しと為すものあらば、そは国民を率ひて一種の迷信者を製造するものなり」<sup>(27)</sup>。

1903（明治36）年の春、人見潤之助がマサチューセッツより彼を訪ねてきた。人見は東京専門学校を1896年に卒業している。関和知とは同窓だったろう。昨年9月にニューヨークで別れて以来の再会であった。お互いの無事を確認、関和知は「宛も兄弟相遇ふの思ひ」と喜んだ<sup>(28)</sup>。一晩中、話が尽きなかった。日本であれば春の訪れを楽しむ季節だが、ニューヨークはまだ雪が舞うこともあった。

イエール大学の名簿に関和知の名が残されている。修了はできなかったが、1902（明治35）年から1903年にかけて大学院に在籍している<sup>(29)</sup>。その後、服部文四郎の勧めもあり、1903年9月に関和知はプリンストン大学へ移籍した。憲法についてウッドロウ・ウィルソンの講義を聴いた。また、毎朝、授業の前にウィルソンがチャペルで祈祷を行う姿に「自ら敬虔の念に打たれしむるもの」を感じた<sup>(30)</sup>。関和知はのちに彼の著書を翻訳する。また、学生新聞『プリンストニアン』を参考に、早稲田大学の高田早苗へ学生新聞の創刊を勧める手紙を送っている<sup>(31)</sup>。同大学に在籍していた服部や、早稲田商業学校の幹事だった牧野孫太郎、静岡県の前代議士である伊藤市平らが喫茶店で集まることもあり、いずれも早稲田の関係者だったことから、1904年7月10日、現地の日本料理店で校友会を催した。

1904（明治37）年にセントルイスで開かれた万国博覧会の様子を、関和知は『新総房』へ書き送っている。展示物のなかでもドイツが際立っており、陶器のできばえや美術品がすばらしいと感想を記し、フランスやイギリスの出品についても事細かに報告した。協賛を取り消したロシアのコーナーには展示物がほとんど置かれておらず、「其不体裁不面目なるは勿論会場全体の美観を毀損せる」と戦時中であるためか、敵国についての評価は辛かった<sup>(32)</sup>。

中村吉蔵が1906（明治39）年の秋、プリンストン大学を訪ねたとき、同じ早稲田出身の関和知と会う機会があった。「海外万里の異域に於て、互に胸襟を抛き、熱誠を尽して、所謂竹馬の友に優るの交情を訂するに至つた」というように、仲良くなった<sup>(33)</sup>。当時の関和知について中村は次のように記している。「この夏は和田守のパラダイスに傭はれて、大西洋の潮風で吹き曝されて来たといふ丈あつて、さすがに顔も手も真黒になつてゐる、未来の大政治家を以て抱負としてゐるが、言葉附も優しく、料理なども巧にやる、するかと思ふと、ハキ〜した声で、滔々として論じ出して忽ち豪傑笑をやる、エドワード、ホールは大に賑になつた」<sup>(34)</sup>。彼はこのホールの3階2号室にいて、プリンストン大学の日本人留学生を相手によく身の上話を語って聞かせたという。

近くに神学校があった。そこへ通う学生に影響を受け、関和知も酒を控えサイダーをたしなむようになった。キリスト教にも感化されている様子だった。彼は中村吉蔵に「僕は何うも人間が小さくなった、品行方正は耶蘇教の賜物で感謝してゐるが、社会へ立つて活動が出来さうもない、何うしたもんだらう」と心の内を明かした<sup>(35)</sup>。自分の意志を実行に移さなければ政治家にはなれないと、中村は関和知を励ました。演説には長けており、ときには「プリンストンこひしやエドワードホール、塔が見えますほのべと」と隠し芸で唄も披露した<sup>(36)</sup>。学監の邸宅でアメリカ人女性とダンスを試みたこともあったという。

とはいえ金のない関和知だった。プリンストン大学での最後の数ヶ月は、千葉県成田山の石川照勤から仕送りを受けてなんとか乗り切った。実は面識がなかった。にもかかわらず、応援してくれたことに関和知は恩を感じていた。「予が落付いて試験を受くる迄、学校に留り得たのは全く師の賜物である」と後年、感謝を綴っている<sup>(37)</sup>。1906（明治39）年6月、関和知はプリンストン大学にてマスター・オブ・アーツの学位を授与された<sup>(38)</sup>。彼は日本に帰ってからも同大学とのつながりを大切にした。1916（大正5）年8月15日、東京でプリンストン校友会が主催となり、ロバート・M・マッケルロイ教授夫妻を招いて晩餐会を行ったとき、関和知や服部文四郎など卒業生が積極的に動いて援助している<sup>(39)</sup>。

こうして4年間のアメリカ留学を達成した関和知だが、帰るための旅費がなかった。ともかく彼は西へ向かい、シアトルの『北米時事』、サンフランシスコの『新世界』『桑港新聞』などで記者として働いた。1907（明治40）年、ワシントン州に早稲田校友会が設立されると、3月22日に関和知が招かれ歓迎会が催された。また、アメリカを視察に訪れていた石井菊次郎の送別会が、8月31日にサンフランシスコの小川亭で開かれた。千葉県人会の主催であった。関和知も駆けつけ、50余名の参加者のなかで演説を行った。10月26日は桑湾周囲青年諸団体連合演説会に出席する。そのときの肩書きは『桑港新聞』の記者であった。翌日、綱島栄一郎の追悼会が米国仏教会で午後3時より始まり、約60人が参集した。関和知も追悼演説を行い、綱島の宗教観、人柄などを語った<sup>(40)</sup>。12月5日に開かれた桑港早稲田大学校友会では、高橋作衛、黒石清作らと撮った写真が残されている<sup>(41)</sup>。これは彼の送別会でもある。12月8日はサンフランシスコの日系新聞各社より記者30人ほどが集まり、午後6時より小川亭にて送別会が催された。いよいよ帰国である。

関和知を乗せた船はハワイに立ち寄り、『布哇報知』の記者が彼を招いた。関和知は東京で新聞記者をすること、そしてチャンスがあれば代議士へ打って出るという志を語っている<sup>(42)</sup>。帰国して1908（明治41）年1月、学資を援助してくれた石川照勤を訪ね、彼は成田山を詣でた。後年、政治家となってからも、関和知は選挙のたびに石川に

会い、成田山で護摩をあげることを通例とした。また、白井喜右衛門らが長生倶楽部の総会を兼ね歓迎会を催してくれた。案内のはがきには「多年北米大学に於て蛭雪之業を積み客臘無事帰朝せられたる関和知君」と記されていた<sup>(43)</sup>。

## 2-2. 『万朝報』『東京毎日新聞』の記者

その後、関和知は友人、円城寺清の勧めもあって『万朝報』で働くことになった。円城寺は1892（明治25）年に東京専門学校を卒業しており、関和知の先輩にあたる。卒業後、『郵便報知新聞』に勤め、改進黨機関誌『立憲改進黨々報』の主幹として活躍した。憲政党から憲政本党にいたるまで党機関誌に携わったのち、1899（明治32）年、『万朝報』の論説記者に迎えられた。関和知がかつて雑誌『新総房』を立ち上げたとき、円城寺は「妄言漫議を戒む」という論説を寄稿している<sup>(44)</sup>。このように関和知は、古くからの友人である円城寺に導かれ、『万朝報』へ籍を置くことができた。そして、社主の黒岩周六から「筆硯の間に直接指導を受けた深き因み」を忘れなかった<sup>(45)</sup>。

関和知は白洋の号でもって、1908（明治41）年7月28日から「移民問題の障碍」と題する論説を連載した。前年、駐日アメリカ大使とのあいだに交わされた行政協定である日米紳士協定により、日本はアメリカへの移住を自主的に制限することになった。カリフォルニア州では1906年の学童隔離事件を発端に、排日運動に火がつき、日米開戦も近いという噂まで飛び交っていた。連邦政府の介入により運動は沈静化し、排日法案も採用されることはなかった。

しかし、問題はいつでも再燃する状態にあると関和知はいう<sup>(46)</sup>。そもそも、移民と殖民は異なるものであり、日本の官僚がアメリカへの移民を殖民と呼ぶことは軽率である。こうした混同が移住先の国民とのあいだに衝突をきたしていると指摘する。日本人は海外において容易にその土地の人々と同化せず、些細なことで問題を大きく取り上げ、本国に保護を求めてくると書き<sup>(47)</sup>、愛国心は誇りに思うが、あまりに頑なでは障碍にもなると関和知は注意を促した。移民は殖民とは異なり、他国のもとに支配されるのだから、他国の制度、慣習を尊重し服することが当然の義務であり、見た目だけでなく精神的にも同化が求められるのだという<sup>(48)</sup>。他国の権利を尊重し、同情の念をもって政府や国民が理解し合うことこそ事態を解決する道であると彼は主張した<sup>(49)</sup>。

一方、関和知は政界への進出を考えていた。1908（明治41）年の第10回総選挙へ打って出ようとしたが、うまくいかなかった。アメリカの選挙を間近に見た関和知にとって、日本の選挙は陋劣なものに映った。彼は当時、在米日本人から服部綾雄、山岡音高らとともに「四十年組」と呼ばれていた。代議士になったのは服部くらいで、ほかは「鹿逐ひの犬引きか力者の禪持ち位の所」しか務めていないと見られていた<sup>(50)</sup>。それでも地道に政党の仕事を引き受け、会合に顔を出し、出馬の機会を捉えようと懸命にもが

いていた。6月14日、憲政本党の園遊会が上野精養軒に催されたとき、代議士や党員、新聞記者、200余名のなかに関和知の姿もあった。

1908（明治41）年12月、大隈重信は経営に行き詰まっていた『東京毎日新聞』を島田三郎から引き受けた。報知社が援助して、1909年1月より頼母木桂吉らに営業を任せることにした。社屋も銀座から丸の内へ移した。武富時敏が社長となり、田中穂積が早稲田大学の教員と兼任で主筆を務めた。大隈はイギリスの『タイムズ』を目指すと意気軒昂であった。

早稲田大学学長の高田早苗は、大隈重信へ次のような書簡を送った。「毎日新聞編脩長には田中より関和知なる者を紹介いたし他の諸君子の同意を得候由、右は久しく米国エール大学に在学し現今万朝報に執筆罷在る者にて、校友中にては先以て適任者と奉存候」<sup>(51)</sup>。田中穂積が関和知を編集長として登用したいと高田に申し出た。また、高田も関和知が在米中に書いた論説を読み、その才能に注目していたという<sup>(52)</sup>。戦後、早稲田初の首相となる石橋湛山もこのとき島村抱月から紹介され、記者として入社している。また、小山東助も加わり、編集を手伝うとともに社説を執筆した。こうして関和知は『東京毎日新聞』の編集長となった。

ところが、政党の派閥争いが新聞社へ飛び火した。1908（明治41）年5月の総選挙で議席を減らした憲政本党は、大石正巳を中心に非政友系の官僚と合同を模索する改革派と、犬養毅を中心に民党路線を堅持しようとする非改革派の対立が激化していた。余波は東京毎日新聞社にも押し寄せ、石橋湛山の回想によれば、「犬養派の記者と非犬養派の記者とが、たがいに自派に有利な記事を出し合っているがみ合った」という<sup>(53)</sup>。雰囲気は険悪であった。1909年3月22日、午後2時より神田青年会館で憲政本党の臨時大会が開かれた。関和知も参加した。党内の紛擾について報告があり、「官僚政治の弊を打破し責任内閣の実を挙げんことを期す」との宣言をなんとか採択すると<sup>(54)</sup>、先に改革派が党議員会で行った犬養の除名を否認する決定をこの臨時大会が下した。犬養は歓呼喝采のなかに迎えられ、演説を行い、午後4時に大会が終了すると、上野精養軒に園遊会を催して犬養自ら党員たちを招待した。参加者は200人を数えた。さらに4月12日、関和知は『東京毎日新聞』の肩書きで、憲政本党の観桜会に出席している。上野公園で午後3時より開かれた。

こうしたなか、副社長兼主筆の田中穂積が1909（明治42）年7月15日、『東京毎日新聞』を辞職した。理由は経営方針の相違である。関和知や石橋湛山もそれに続いた。小山東助は若手社員らを引き留めようとしたが、聞き入れてもらえなかったという<sup>(55)</sup>。

### 3. 排日運動と衆議院議員

#### 3-1. カリフォルニア州外国人土地法

1909（明治42）年7月、関和知の郷里、千葉県で衆議院議員の補欠選挙が行われることになった。第10回総選挙で当選した安田勲が日糖事件で捕まり、議員を辞職したためである。千葉県の憲政本党は関和知を推薦した。郷里の非政友派、長老たちの支援を受け予想外に健闘したが、結果は落選であった。ところが、またしても議員が失職した。今度は鈴木久次郎が大日本水産の資金を使い込み、株主から告訴され、議席を失った。こうして、1909年11月、先の選挙で次点であった関和知が衆議院議員となった。結成間もない国民党に所属し、犬養毅の下で活動することになった<sup>(56)</sup>。

1911（明治44）年3月18日、国民党の代議士会が開かれたとき、アメリカへの移民渡航禁止について、屈辱の外交に反対する建議案が提案された。しかし、関和知は対米外交をますます紛糾させるとして、この提案に反対している<sup>(57)</sup>。とはいえ、彼の意見は通らず、小さな修正をほどこして国民党は原案を採用した。

また、関和知は高木正年、服部綾雄とともに、1913（大正2）年4月8日、カリフォルニア州外国人土地法案について外務省に松井慶四郎次官を訪ねている<sup>(58)</sup>。一昨年はウィリアム・タフト大統領の尽力で事なきを得たが、いよいよカリフォルニア州議会は法案を通そうとしていると、松井は関和知らに語った。大統領や国務長官と連携して対応していると説明を受けた。翌日、国民党は常議員会を開き、カリフォルニア州の土地所有禁止法案は日米の親善を阻害するものであり、通過した場合は日本において報復措置をとるべきであると決議した。同日、関和知はこの問題について話し合うため、服部、相島勘次郎、頼母木桂吉らと対米相談会を帝国通信社に開いた<sup>(59)</sup>。さらに4月12日も、精養軒で対米相談会を続けることを決め、関和知は島田三郎、竹越与三郎らと発起人を務めることを快諾した。

4月11日、東京商業会議所の中野武嘗会頭は、島田三郎、菅原伝、竹越与三郎、そして関和知らと会い、対米問題を話し合うための全国六大商業会議所会頭の集会に向けた準備を相談している<sup>(60)</sup>。そこで対米同志会を組織することが決まり、決議の草案も検討した。

予定どおり、1913（大正2）年4月12日の夜、日米同志会の組織相談会というかたちで、築地精養軒に会合が開かれた。東京商業会議所の中野武嘗会頭が座長につき、島田三郎らが排日問題について演説を行った<sup>(61)</sup>。会長には渋沢栄一、副会長に中野が推されて賛成多数で決定した。関和知も含め、新聞記者、実業家など約100人が参集した。

南カリフォルニアの日本人会は、4月14日、法案の形勢が不穏になっていると新聞社や政治家に訴えた<sup>(62)</sup>。渋沢栄一に宛てた通信には「当局を督励し輿論を指導し十分の援助あらんことを懇請す」と記され、関和知や服部綾雄などにもこの電報を伝えてほしいとの依頼が託されていた。4月15日に法案は州議会下院を通過し、事態はいよいよ切迫したものとなった。

4月17日には、対米問題演説会が国技館において催され、関和知も登壇者の一人となった。春の冷たい風の日、両国橋を渡る電車は満員、人々は続々と会場へ押し寄せた。「立憲青年独立党主催、対米問題国民大会」の看板が立ち、紅白の垂れ幕が飾られた<sup>(63)</sup>。聴衆は数千人を集めた。午後1時、けたたましい爆竹の音とともに、森田義郎が壇上へ上がり開会の挨拶が行われる。続いて、三宅雄二郎、山口弾正、斯波貞吉らが次々と熱弁をふるった。関和知は次のような演説を行った。日本人は偏狭な愛国心を持っているとアメリカ人はいうが、移民を受け入れないアメリカ人こそ偏狭な愛国心の持ち主である。平和的解決を望むが、外交任せではだめである。国論を喚起する必要がある。アメリカ当局が悟るところがなければ、「遂に最後の手段に訴ふる外無かる可し」<sup>(64)</sup>。当日は学生のほか、角帯、雪駄履きの番頭から前垂れ姿の小僧までが参加し、アメリカの横暴に憤慨、演説に歓声を浴びせ、絶叫し、爆竹を鳴らして大騒ぎを繰り広げた。

1913（大正2）年5月7日、国民党幹事の関和知、高木正年は再び外務省を訪れ、午前11時頃、松井慶四郎次官からカリフォルニア州の排日法案について説明を受けた<sup>(65)</sup>。ワシントンにはいまだ日本大使から正式な抗議は行っていないという。まだ、連邦政府から大使へ通告はない。最恵国条款を理由にするのでは弱いので、政府としてはあくまで条約違反として抗議する予定である。財産の相続を禁止するような法律は、財産権を侵害するものであり現行の条約に反している。それはそれとして、根本的な解決はまだ難問であり、今のところ日本人には帰化する権利もないという。会談の内容は高木により、同日開催の国民党常議員会で報告された。

### 3-2. オランダのハーグへ

この頃、東北方面を遊説していた犬養毅らは、青森から秋田に入り、山形へ向かう予定であった。国民党本部はこの遊説を応援するため、関和知を派遣して犬養を助ける計画を立て、さらに犬養は5月下旬に石川、福井など北陸へ関和知、相島勘次郎らをともなって出発する考えであった<sup>(66)</sup>。

東京では5月14日、列国議会同盟会議の日本議員団評議員会が開かれ、代表者の選出につき協議を始めていた。派遣委員は4人、うち政友会2人、同志会1人、国民党1人と決定した<sup>(67)</sup>。カリフォルニア州の土地問題について、この会議でなんとか議題に

あげられないかという思惑があった。

5月23日付『読売新聞』は、国民党には希望者が3人いるが、おそらく関和知に決定するだろうと報じている<sup>(68)</sup>。そして、6月2日午前10時より開かれた国民党の協議員会で、幹事の関和知が派遣されることに決まった。同日午後4時から、国民党本部では茶話会が催され、末広重雄博士を招いてカリフォルニア州外国人土地法に関する講話を聴いた。これは条約違反というより、アメリカ憲法の問題であると末広は語った。

第18回列国議会同盟会議には、清水市太郎、堀切善兵衛、神藤才一、関和知、斎藤隆夫が出席することになった。日本側からアメリカの排日問題を議題として出すべきという考えもあったが、1913（大正2）年6月6日、日本における事務局幹事の一人が意見を出し、ほかの国から動議があるまでは提案を見合わせる方向に傾いていた<sup>(69)</sup>。しかし、6月20日、清水はアメリカの排日問題を提案すべきであると表明し、当日の衆議院における送別会で賛同を求めた<sup>(70)</sup>。伊藤かおりによれば、それを実行に移したのは神藤才一で、清水も賛同したが、関和知、斎藤隆夫、堀切善兵衛は穏やかでないとして難色を示した<sup>(71)</sup>。結局、提案が会議の表に出ることはなかった。

さて、関和知は斎藤隆夫とヨーロッパへ向かうことにした。1913（大正2）年7月12日、午前8時半の汽車で新橋を発つ。朝鮮を經由してシベリア鉄道を使う予定である。朝鮮半島に渡った2人は、鴨緑江で鉄橋をまたぎ支那へ入る。関和知はプラットフォームで「敷島」というたばこを8銭で買った。ロシアに入るまで大事に吸うことにした。鉄橋を守備しているのは日本兵であり、「帝国主義の発展、如何にも愉快を覚えた」との感想をもった<sup>(72)</sup>。鶏冠山駅では日本式の弁当も売っていた。饒別にもらったウイスキーを開けて食べた。

7月15日に長春へ到着し、ここからロシアの勢力圏に入る。「外国人となる訳で、何となく初めての旅の心細さを感じた」という<sup>(73)</sup>。関和知らは二等切符でシベリアを横断した。同日、午後2時にはハルピンに到着し、斎藤隆夫と列車を降りて待合室で休憩をとり、その後、ハルピンの市街を視察に出かけた。ロシアの東方経営が進んでいるとの印象をもった。ソーダ水を飲むにも代金以外に手数料を取られ、待合室で椅子に座るにも席料が必要というので彼らは驚いた。食堂車の料理も高いので、途中の駅でオレンジやパン、ソーセージを買い求めたが、オレンジは食べられたものではなく、パンも高く、あまり節約にはならなかったという。

イルクーツクまで来て、関和知らはモスクワ行きの列車に乗り換えた。それ以降、頻繁にすれ違う列車には3等車にシベリアへ向かう移民が満載しており、兵士などが送られる様子も見て、日本はまだ安心できないと感じた。7月21日頃、ウラル山脈に入る。列車は森林のあいだを突き進んでいく。ボルガ川の大鉄橋をまたぎ、7月23日、彼らはようやくモスクワへ到着した。

翌日、首都ペテルブルクで大使館から出迎えがあつて、ホテルアスターへ荷物を下ろし、昼食を取るため馬車で移動する。日本料理をふる舞われ、関和知は日本酒の味に喜んだ。午後からは大使館員の案内で宮殿などを見て回る。市内は開放的で往来も自由であることに驚いた。とはいえ、流行遅れのファッション、身分別の車両などロシア的であつた。

7月25日の午後6時、彼らはベルリン行きの列車に乗り込み、ペテルブルクを後にした。関和知と斎藤隆夫、60歳くらいの老人、30代半ばの若者が一室に乗り合わせた。若者は英語ができたので話をした。スウェーデン人でイギリスへ向かう途中であるという。関和知は思うところがあり、この若者を警戒した。果たして、ドイツ国境で彼がパスポートをもっていないことがわかり、警察に引き渡されるという一幕があつた。駅で警備に当たっていたドイツ兵の厳めしさ、また税関の厳しさに関和知は注目した。「一線の国界が、斯くも相違を示さんとは、実に意外に感ぜざるを得ぬ。粗大にして不秩序、陰鬱にして遅鈍なる、露国を去りて、一步独逸に入れば、万事万端、規律あり、秩序あり、快活、敏捷、勤勉、精緻、一寸の抜目も無く、半点の油断も無く、生動活躍の氣、如何にも気味気味して居る」<sup>(74)</sup>。関和知は食堂車でドイツのビールを楽しみ、酒の飲めない斎藤はソーダ水で昼食を取った。彼らは無事、ベルリンに到着した。

ベルリンでは、自分たちで行動することにした。ともかく当地にある松下旅館を目指した。自動車が行き交う秩序だった町並みに彼らは驚いた。旅館には留学生や会社員、役人がたむろしていた。旅行シーズンで空き部屋がなく、2人は向かいの下宿屋に落ち着いた。そしてベルリン周辺を見て回ることにした。ポツダムでサンソーシ宮殿を見学し、郊外の遊園地に立ち寄り、大使館を訪問した。斎藤の希望で裁判所に出かけ、民事事件を傍聴した。宮殿で衛兵交代を見た関和知は「挙止進退、規律、訓練の過度なるは軀て機械的人形の様にて滑稽的に見えた」と感想を記している<sup>(75)</sup>。

その夜、杉村虎一大使に招かれ、先に到着していた政友会の堀切善兵衛らと夕食をともにした。話題が日米関係に及んだ。杉村はアメリカが孤立しつつあるという。関和知や堀切は人種間の衝突に目を向けるべきとの意見だった。その点では、日本が孤立することもあるだろう。帰りがけ、堀切の案内で一行はカフェ・ナショナルを訪れた。娼婦が媚びを売る姿に「風教上より見れば一種の魔窟」と関和知の目には映った<sup>(76)</sup>。とはいえ、カフェが手軽な社交場ともなっており、料理屋で時間のかかる日本より、話をするには手軽に済ませられると感じた。

その後、関和知はハンガリーを訪れ、東洋的などころから「欧州の日本」と呼び、居心地の良さを感じている<sup>(77)</sup>。また、イタリアのベニスへ足を伸ばし、ローマでは古代文明の偉大さに感心した。彫刻、絵画などを斎藤隆夫と語り合いながら見物した。ただし「同君の法律眼一点張りには殆ど閉口」とも記している<sup>(78)</sup>。ミラノから北上してパ

りに着いた関和知は、同郷の石井菊次郎らに会っている。パリでは10日間ほど滞在し、グランド・オペラでファウストを見たりしてくつろいだ。ベルギーのブリュッセルで斎藤隆夫と別れ、ワテルローの古戦場を見学した。こうして彼らはシベリア鉄道でロシアを横断し、ベルリン、ローマ、パリなどを巡って1913（大正2）年8月31日、オランダのハーグへ到着した。

### 3-3. 第18回列国議会同盟会議

第18回列国議会同盟会議は1913（大正2）年9月3日から9月5日に開かれた。19か国282人の議員が参加した<sup>(79)</sup>。中立国の権利や戦費の借款、国際平和事業などについて話し合われた。日本からは先に記した5人が出席する。関和知は「五人の議員何れも特色ある連中のこととて随分喧嘩もやらかし候」と記している<sup>(80)</sup>。

ハーグに集まった日米の代議士たちは、両国の問題を平和的に解決することで一致し、日米部会を作って相互に覚書を交わすなど外交を行った。9月5日、ハーグのビネンホフで列国議会同盟日米部会創立会が催され、アメリカの下院議員、ウィリアム・デイビッド・ブレイクスリー・エイニーの招集により、関和知、斎藤隆夫、清水市太郎、神藤才一、堀切善兵衛が出席した<sup>(81)</sup>。政府からの依頼でこのような接触を試みたのではなく、双方の議員の自発的な行動によるものである。とはいえ、覚書などは双方の政府に送付し、新聞社にも説明を試みている。提案は日米の親しい関係を継続すること、非公式だが日米の問題を検討することである。清水がこの部会の長として選ばれた。

その後、1914（大正3）年4月20日、日本の議員団評議員会は、この日米部会を承認している。そして、6月22日、アメリカ下院から日米部会の議員としてウィリアム・エイニーが来日した。接待委員として関和知、清水市太郎、堀切善兵衛が選ばれ歓迎した。6月27日に列国議会同盟日米部会が衆議院の図書館で開かれ、エイニーは「上下両院各派の有力なる議員諸君より熱誠なる歓迎を受け感謝に堪へず」と謝辞を述べた<sup>(82)</sup>。

一方、政友会の江原素六とともに、排日問題の慰問のためアメリカへ渡った国民党の服部綾雄は、ロサンゼルス、テキサスなどを視察し、ハーグからアメリカへやって来る関和知を待って、11月にともに帰国する予定を立てていた<sup>(83)</sup>。関和知はハーグでの会議が終わったあと、イギリスのロンドンで「アン女王の館」というホテルに2週間ほど滞在しアメリカへと向かった。

ロンドンに滞在したときの様子を、関和知は『実業之世界』へ書き送った。「市中到る処遊惰の気風が漂ふて居る。即ち夜は芝居とか、寄席とか或は宴会などが、各処に其幕を開いて居る。政治家も実業家も皆此夜の歡樂に酔ふて居る」<sup>(84)</sup>。イギリスは絶頂から衰退へ向かっているのではないか。しかし、アメリカに発つ3日前、駐英大使の井上

勝之助に、マンチェスターやリバプールを見なければ英国を理解できないと諭され、関和知はマンチェスターを視察に行った。そこでイギリスの基礎が盤石であることを知る。ロンドンとは異なり、会社の重役から職工にいたるまで規律正しく働いており、「流石に世界工業の中心地」との感想をもった<sup>(85)</sup>。そこで日本製品に対する信用が低いことを教えられ、頹廢を嘆くとともに、まがい物を輸出しないよう品質管理の徹底を読者に訴えた。

アメリカでは早くも、1913（大正2）年6月4日、在米邦字紙『新世界』に「国民党代議士関和知氏は在米同胞慰問を兼ね排日実相の調査のため近く渡米する筈」と報じられていた<sup>(86)</sup>。9月29日、関和知は堀切善兵衛とともにニューヨークに到着し、日本倶楽部に滞在した。10月8日、ニューヨークを発って、翌日、彼と堀切はワシントンで大統領、上下両院を訪問した。列国議会同盟日米部会で親しくなったアメリカの議員たちにより、議会で紹介され、大統領にも会うことができた<sup>(87)</sup>。彼らは晩餐会に招待され、ハーグで出会った議員たちと再会し歓待された<sup>(88)</sup>。

その後、シカゴへ立ち寄り、グランドキャニオンを観光して、関和知と堀切善兵衛はロサンゼルスへと向かう。サンタフェ線で10月18日午後2時、無事、ロサンゼルスに到着すると、日本人会の人々が出迎えた。彼らは太平洋ホテルに宿泊し、10月21日の午前9時、サンフランシスコへ向かう。宿泊先の小川ホテルに、日本人会の関係者らが訪れた。関和知と堀切は、列国議会同盟会議でカリフォルニア州の土地問題を議題にしようとしたが、結局、アメリカの議員をはばかりて揉み潰されてしまったと彼らに報告した<sup>(89)</sup>。とはいえ、日米部会を発足させ、両国で新聞雑誌などを通じて輿論を善導し、議会内で尽力することを申し合わせたと説明した。

10月22日の午前中、彼らはカリフォルニア大学バークレー校を参観し、日本人学生倶楽部でヨーロッパについて話をした。午後は領事館からの招待を受け、夕刻にはサンフランシスコの千葉県人会が関和知の歓迎会をサター街みどり亭において催した。10月23日には、日本人会の主催で小川ホテルにおいて歓迎会が開かれる予定であった。堀切善兵衛は一足早く10月24日の香港丸で帰国する予定であり、関和知は10月30日に春洋丸に乗ることを考えていた。現地の新聞『新世界』には、10月24日に学生会が関和知を招き、講演会を開く予定であると報じられている<sup>(90)</sup>。10月27日は、サンフランシスコの早稲田大学校友会に招待され、関和知は午後7時より晩餐会に出席した。10月28日は有志らと午後6時からフランス料理店で食事をともにしている。これはサクラ会の招待で、関和知はヨーロッパの情勢などを2時間半にわたって説明した<sup>(91)</sup>。

予定どおり春洋丸でサンフランシスコを発った関和知は、途中、ハワイに立ち寄った。1913（大正2）年11月5日、午前6時半頃、春洋丸がハワイに現れると、現地の新聞『日布時事』の記者が訪れ、彼にインタビューを行った。関和知はアメリカ留学か

ら帰国する際、ハワイでその記者の家に泊めてもらったことがあった。「関和知氏は、イヤ、お久しぶりと握手」した。そして人の死を喜ぶわけではないが、「桂公爵の逝去は我国政界の為めには歎ぶべき事に属す」と述べた。やはり民党で大同団結を目指すべきだとの考えを示した。「大隈伯を総裁とし政友会に対抗する大政党を組織する機会の到来を予期するもの也」<sup>(92)</sup>。犬養毅と加藤高明、尾崎行雄は接近できないわけではないと述べ、新党の結成を熱心に説いたという。11月16日、春洋丸は無事に横浜へと入港した。同じ船に女子英学塾塾長の津田梅子や慶應義塾塾長の鎌田栄吉も乗っていた。

さっそく、関和知の談話が『東京朝日新聞』に掲載される<sup>(93)</sup>。ニューヨークなど東海岸の資本家、政治家は排日問題に関して、日本に同情的である。現地の新聞も同様である。なんらかの条件をつけ帰化権か土地所有が許されるのではないか。そのように楽観的な見通しを語り、また、アメリカの関心が東洋ではなく南米にあると、在米日本人の有識者は信じているが、むしろアメリカは中国に市場を求める野心をもってると、感想を漏らした。

国民党は彼を慰労すべく、11月28日、木挽町の万安楼に宴会を企画した。12月1日は、話を聞こうと、早稲田の明治28年卒業生たちが発起し、招待会を催している。渡辺外太郎をはじめ、郷里で『新総房』を立ち上げたとき以来の仲間が集まり、亀島町の偕楽園で関和知は楽しいひとときを過ごす。

翌年、1914（大正3）年1月発行の『実業之世界』で、関和知は改めて排日問題を論じている。外交や経済の問題もさることながら、感情の行き違いが誤解を生み、衝突を引き起こす。日露戦争後の武力拡張に対してアメリカ人が猜疑心をもつようになり、日本人が一等国民という自負を抱くようになったことなども原因である。なかでも、支那に共和国が樹立されたことでアメリカ人の関心は一変しているという。関和知は「将来と雖も東洋の覇者となるべきものは日本であつて、支那共和政治の前途は実に悲観すべきもの」と記しているが<sup>(94)</sup>、アメリカへの日本人留学生が減り、交流が停滞している現状に危機感を示す。常日頃から人を送り、互いの理解を深めるようであればならないと訴えた。

その後、衆議院が4月2日の正午より、列国議会同盟会議の出席者5人を招いて、食堂で午餐会を開催した。堀切善兵衛以外の4人が出席した。日米部会について報告があり、神藤オーが演説を行った。

### 3-4. ウッドロウ・ウィルソン『新自由主義』

関和知がアメリカに立ち寄ったとき、ウッドロウ・ウィルソン大統領は任期1年目だった。ニューヨークで本屋を訪れた関和知は、店員の勧めでウィルソンの『新自由主義』を買った。「読み行くに従つて予は電気に打たれたるが如く、巻中に漲る自由と平

等と公正との力に動かされて、是非之を和訳して日本人に見せ度いと思つた」という<sup>(95)</sup>。そこで、ホワイトハウスで大統領に面会したとき、彼はこの『新自由主義』を翻訳したいと願い出て、ウィルソン本人から快く許しを受けた。さっそく、関和知は西部へ向かう列車のなか、そして、サンフランシスコから日本へ向かう船のなか、コツコツと翻訳作業を行い、帰国後、1914（大正3）年3月、勸学社より『新自由主義』を出版した。駐日大使のジョージ・ウィルキンス・ガスリーが推薦文を書いた。

かつてプリンストン大学に在学中、関和知はウッドロウ・ウィルソンの法理学、立憲政治論の講義を受けた。党閥や情実で動く日本の政界に比べ、能力と人格で大統領となったウィルソンは彼にとって理想の人であった。この訳書が発売されたとき、関和知は「白館の主人公」と題して、ウィルソンの伝記を富山房の雑誌『学生』に掲載し、近日中に訳書を出版すると宣伝した<sup>(96)</sup>。この文章は『新自由主義』の巻末に収録された。また、『青年』1914（大正3）年3月号の広告では、「聴け！！！！隣邦大元首の一大獅子吼を！！！」と記されている<sup>(97)</sup>。訳書はサンフランシスコの書店、青木大成堂よりウィルソン大統領に届けられ、彼から礼状が送られた<sup>(98)</sup>。

『新自由主義』はウッドロウ・ウィルソンの選挙中の演説をまとめたものである。ウィルソンは雇用に関する法律が古くなり、大会社に雇われる人々の問題に対処できていないという。「何故に労働問題は起るのであるか？ この理由は単純且明白である、即ち労働者と雇主とが昔日の如く親和的關係を有してゐないからである」<sup>(99)</sup>。大会社の力が強すぎて新たな起業が阻害されている。自由放任では個人が事業を興すことは難しい。大企業の経営者という一部の人々だけでなく、国民一般の利益を目指す政治を主張する。

保護関税もまた特定の人々にのみ利益を与えている。勝手に価格を設定して競争をなくし、事業への新たな参入を不可能にしている。関税は公共の利益をもたらすように定めねばならない。そして、大企業のトラストを批判して、「余は、私的な独占業は弁護する余地なき者であり、又許すべからざる者であると云ふ主張を確く守つて動かない」という<sup>(100)</sup>。関税やトラストは自然の進歩を阻害し、発明的天才を抑圧していると訴えた。

『東京経済雑誌』は、『新自由主義』が企業のトラストを攻撃し、保護関税を非難していると紹介し、「米国内産物の因襲的弊害」を知ることができると評価した<sup>(101)</sup>。また、『国民経済雑誌』は『新自由主義』を取り上げ、現職大統領の政治社会に対する考えを知ることができる。「昨今欧羅巴でも流行の民主主義の色彩が、著しく漂ふて居る」と紹介した<sup>(102)</sup>。

関和知はウィルソンから学んだこと、欧米を視察した経験をふまえ、1915（大正4）年1月1日、『警世新報』に「国民の覚悟を望む」と題する論考を掲げた<sup>(103)</sup>。日本は欧

州大戦で世界の注目を浴び、一等国の地位を占めるようになった。これまで欧米の国々にとって、謎であった日本は恐れられ、嫉まれ、卑しまれてきた。それは日本を誤解してのことである。大戦に参加したのは「世界共通の幸福を目的」としたものであり、この機会を利用して支那を処分したり、南洋を占領するような目先の利益を主張してはならないと戒めた。そのようなことをすれば、「火事場泥棒の根性」と見られ、かえって国を害することになろう。欧米の信用を高めて、人種的な感情を打破するには慎みが大切であると述べ、一等国民としての覚悟を読者に訴えた。

### 3-5. 十四カ条の平和原則

『新自由主義』が出版された1914（大正3）年1月、海軍の汚職事件が発覚し、山本権兵衛内閣への批判が高まっていく。衆議院予算委員会で島田三郎が追及し、新聞社各社が海軍の腐敗を報道するなか、2月10日に日比谷公園で開かれた国民大会に大挙した群衆は、野党が提出した内閣弾劾決議案が葬られたことに激怒し、国会議事堂を包囲した。3月に貴族院が海軍予算の削減を決めると、予算案の不成立から24日、山本内閣は退陣へ追い込まれた。

その後、第二次大隈重信内閣が成立するも、国民党は閣外協力にとどまり、犬養毅は入閣を拒んでしまう。関和知は与党となるよう説得を試みるが受け入れられず、脱党して大隈の下へ馳せ参じた。大隈もこの若き改進黨系の代議士に目をかけ、内務大臣秘書官として側に置いた。第12回総選挙に勝利したのち、彼は新設の副参政官に抜擢され司法省に務めた。

1915（大正4）年10月、東京の有力新聞社が視察のためアメリカへ人を送ることにになり、関和知は大隈重信に相談して、大隈は松井慶四郎外務次官に便宜を与えるよう指示した。関和知は通信省や農商務省ともかけ合って、彼らが渡米できるように計らった<sup>(104)</sup>。もちろん、排日問題を含んだ日米関係改善に向けた活動の一環であった。9月24日、帝国ホテルで盛大な送別会を催し、参政官の田川大吉郎とともに、問題解決の希望を語り送り出している。また、サンフランシスコの記者団にも連絡して応援を頼んだ。

翌年、大隈重信が総理大臣を退くと、関和知は加藤高明を総裁とする新党、憲政会へと合流した。そして、苦節10年、長い野党生活を送ることになる。彼は憲政会で議会報告書の起草を一手に引き受け、幹事長、総務となって衆議院の最前線へ進み、首相、大臣を相手に論戦を挑んだ。

第一次世界大戦勃発から3年が過ぎた1918（大正7）年1月、アメリカ大統領ウッドロウ・ウィルソンは十四カ条の平和原則を発表する。戦争が終結したとき、日本の首相は原敬であり、9月より政友会内閣が発足していた。

こうしたなか、関和知が翻訳したウッドロウ・ウィルソン『新自由主義』も、縮刷廉価版として天佑社から復刊した。12月19日付『東京朝日新聞』の広告には、「苟くも国民たるもの「新自由主義」を味読せざれば、現代世界の一大思潮を解する能はざるべし」と宣伝された<sup>(105)</sup>。翌年、1月19日付では「第五版出来発売」と記され、需要が一気に高まったことがうかがえる<sup>(106)</sup>。雑誌『中外』2月号は「ウィルソンが正義人道自由を口にしながら、汎米主義を盛んに実行しつつある今日、本書の新自由主義が如何なるものであるかを知るのも亦一興であらうと考へる」とし<sup>(107)</sup>、また、『帝国文学』3月号は「世界の羅針盤を以て自ら任じ、今や身を挺して欧州に赴き着々所信の実現に奔走してゐる」ウィルソンの演説集であると紹介した<sup>(108)</sup>。

さらに関和知は1919（大正8）年4月に、止善堂書店より発刊された外交研究会編『ウィルソン言行録』に序文を寄せている。パリ講和会議において「万邦平和の盟主として一世の仰望を蒐めつゝあるものは、実に大統領ウッドロウ、ウィルソン氏である」と紹介し、新思潮、民本主義、民本政治を理解、体得できると推薦した<sup>(109)</sup>。本書には十四カ条の平和原則が収められていた。

1918（大正7）年に発表した「現代米国の政治家を論じて汎民主主義の将来に及ぶ」と題する論文で、関和知は次のように述べている。アメリカの参戦により、ドイツ皇帝の野心はアメリカ大統領の民主的人道主義に屈服しつつある。これは単なる幸運ではなく、ウッドロウ・ウィルソンの才能により国内輿論をまとめた結果である。「民主主義の米国は世界に向つて平和の保証者たる位置に立つべく、独り政治上、軍事上の勝利者たるのみならず精神的、道徳的の一大勝利を以て彼は無上の満足とすべきを疑はない」と書いて、関和知はウィルソンを褒め称えた<sup>(110)</sup>。

また、雑誌『大観』が「如何なる条件を以て媾和は成立すべき乎」という特集を組んだとき、関和知も意見を寄せ、「即ち独逸の世界人類に対つて犯せる罪惡を充分に懲罰し永久平和の基礎を確立するを要す」と、十四カ条の平和原則を具体化するような講和にすべきであると主張している<sup>(111)</sup>。雑誌『青年』でも、次のように語る。日本人は民族として不利な立場にあるため、これを契機に世界の人道・正義・平和のために白人と協力し、人種的偏見を緩和すべきである。連合国から疑われるような野心を見せてはならない。さもなくば「第二の独逸たるが如き運命を自ら招く」と注意を促した<sup>(112)</sup>。

そして、雑誌『一大帝国』で「世界の大勢に順応せよ」と呼びかけた。とりわけ国際連盟への加盟を重視した。加盟により軍備が脆弱になるのではないかとの声に対し、「然しながら斯くの如き議論は、実に時代錯誤の甚しきものであつて、今日の世界思潮の上から考へるときは一顧の価値だもないものである」と反論した<sup>(113)</sup>。平和主義が軍国主義を打破したのが欧州大戦であると捉えていた。軍閥が政権を取り、軍国的雰囲気をもとうことを改め、日本も平和主義を掲げて列国とともに歩むべきであると主張し

た。にもかかわらず、関和知はシベリア、支那における権益は確保せねばならないという。彼の考える「平和」とは欧米列強における関係の内にしかなかった。

翌年も憲政会機関誌に「政治上の道徳的勝利」を寄せている。そこでも大戦の結果、国内外の政治は道徳に基礎を置かねばならないと関和知は主張する。これまでの政治は権謀術数により不道徳の観念が支配してきた。19世紀の物質主義、科学万能の時代は強者すなわち勝者であった。弱者を食い物にする「適者生存の哲学の横行」があった。こうした野獸的凶暴の文明に心酔したのがドイツ皇帝であり、その野心は大戦によってくじかれた。そして日本を振り返り、元老、軍閥、政友会を批判する。「政権を弄びて何等の抱負無く、無能を以て自ら証明する政友会の如くして、果して何の為めの政権ぞ」と憤りを隠さない<sup>(114)</sup>。

1919（大正8）年7月1日、関和知は憲政会幹事長として連合国の大使館を訪ね、対独講和条約締結の祝意を伝えて回った。翌日は午前11時、平和克復祝賀会で開会の辞を述べ、憲政会を代表して午後1時、宮中に参内し対独講和条約締結の賀詞を述べた。

### 3-6. 世界的市民としての修養と教育

こうして第一次世界大戦は終わり、関和知はアメリカ大統領ウィルソンを支持して、訳書の復刊に始まり多数の論説を書いて、欧米列強との協調と、その範囲に限定された「平和主義」を訴え、軍人が首相となる日本の現状を批判した。とはいえ、アメリカにおいて排日問題が払拭したわけではない。1919（大正8）年2月1日、予算委員第一分科会で、関和知は質問を行っている。

アメリカで移民の門戸が開かれないことについて、彼は次のように考えた。「日本人特有の思想が、それが亜米利加の国民、亜米利加の政府、亜米利加の政治若くは社会上の実際から見て、何か妨げになり、向ふの眼から見て頗る目触りになると云ふやうな点、それが最大原因を成して居るやうに承知を致して居るのであります」<sup>(115)</sup>。政府は日本の国体精神というようなものを、移民でさえ養わねばならないという方針をもっているのではないか。それは大局から見て逆効果であると訴えた。外務次官の幣原喜重郎は、そのような方針を政府が決めたことはないと否定した。そのうえで、在米日本人への感情は改善されているとの認識を示した。

『実業之日本』で「米人の社会的生活につき何を学ぶべきか」という特集が組まれたとき、関和知も意見を求められて発言した<sup>(116)</sup>。成功への野心とともに、アメリカ人は博愛や慈善の精神も豊かである。彼らの生活を理解して初めて、人種問題の解決は進むのであり、国家的利己心のみで争ってはならないと注意を促した。

こうした考えは雑誌『太陽』に掲載した「米国の政争と排日問題」や『教育時論』の「米国排日の真因を論じて教育方針の革新に及ぶ」にも引き継がれている。

まず、『太陽』の論考では大統領選に触れ、選挙のたびに排日問題が争点となり、労働者の支持を得るため共和党、民主党、どちらも排斥を訴えるのはやむを得ないと理解を示す一方、移民から市民権を奪うような主張は行き過ぎであると批判する。そして、在米日本人の問題にも目を向け、本国の政治が軍国主義、侵略主義を連想させ、アメリカに疑いを抱かせており、また、「同胞の米国に移住する者の間に依然たる日本的感情を固執して、永久に米国の国民となり、共和国の要素たるべき修養を閑却し、毫も同化の精神なき者少なからず」と、移民の態度にも問題があると指摘した<sup>(117)</sup>。

次に、『教育時論』において次のように論じている。本国において投票権をもたない者が、アメリカで大統領選に参加するのは無理がある。日本において言論、集会、労働組合結成の自由が制限されているため、移民がこうした権利を理解することが難しい。日本人は「国際的国民或は世界的市民としての修養と教育とに於ては、殆ど養ふところなく、従つて他国家他国民に対する同情的理解を欠くことは著しい事実」と現状を分析し、単純に移民が職を奪うというような経済的な問題だけでなく、世界的市民たるべき教育こそが大切であると訴えた<sup>(118)</sup>。

そして、議会においても、たとえば1921（大正10）年2月16日、憲政会、国民党、無所属倶楽部の三派連合で内閣不信任案を提出したとき、登壇して演説を行うなかで、アメリカの排日問題が再燃していることに注意を促している。講和会議において人種問題を議論するとき、外交的交渉を事前に行うことなく欧米を刺激した。「初めに彼等を刺戟して彼等を驚かし其結局に於て斯の如き所の竜頭蛇尾に終った」と政府の失策を追及している<sup>(119)</sup>。

もっとも、人種差別撤廃条項を国際連盟規約に入れるよう提案する会議で、全会一致を要求し、投票結果を覆して葬り去ったのは、講和会議の議長であるウッドロウ・ウィルソンであった。箕原俊洋によれば、その判断はカリフォルニア州民と連邦議会への配慮にあったという<sup>(120)</sup>。

その後、1921（大正10）年11月より開かれた海軍軍縮、極東太平洋問題に関するワシントン会議について、関和知は『教育時論』に「太平洋会議と国民的反省」を發表している。日本を圧迫するためのものではなく、人道正義、平和の理想に基づく会議であると擁護したうえで、彼は日本の外交が欧米の誤解を招いていると説明する。政府は欧米人の性質、気風を理解していない。「自己の所信を率直に主張して他の疑惑を明白に指摘することは、欧米人の性質気風である」と述べ<sup>(121)</sup>、無用な遠慮をして互いに憶測し、曖昧のなかに解決を見ようとするのは東洋人の特別な心理状態であると指摘する。それは断じて欧米人に通用しない。関和知は国民にもその気風の改善を訴えた。

#### 4. おわりに

経済的資本に乏しい青年が政治家への夢を抱いたとき、周囲の支援が頼みの綱となる。関和知にとって、それは地元での政治的なつながりであった。自ら新聞を立ち上げ自由党系と争うなかで、彼は長老、同志に認められていく<sup>(122)</sup>。その後も拠点としてのメディアを維持し、政治的ネットワークの結節点に位置することで、社会関係資本の蓄積に努めた。やがて、アメリカ留学の機会をつかみ、さらなる飛躍を目指して関和知は太平洋を越えた。在米中も邦字紙に勤め、帰国後は中央のメディアで記者、編集長となり、1909（明治42）年に衆議院議員として国政へ進出するという、海外経験をもつメディア議員である。メディアが二重生活として食い扶持を与えるという機能は、実際、帰国のための旅費を彼にもたらし、その後も国政へ進出するまでの腰掛けを『万朝報』『東京毎日新聞』に用意した。

一方、在米日本人にとって関和知は、アメリカ帰りの国会議員として、現地の問題を本国へ伝えるメディア（媒体）と見なされた。カリフォルニア州外国人土地法案について、1913（大正2）年4月、彼は高木正年、服部綾雄とともに、外務省へ松井慶四郎次官を訪ねている。同日、この問題を話し合うため対米相談会を帝国通信社に開いた。そして、東京商業会議所の中野武堂会頭らに会い、集会に向けた準備を整えると、国技館において対米問題演説会を催して自らも演壇に立つ。その後も、外務省を訪問して情報収集を行った。

そして、列国議会同盟会議の日本代表に選ばれ、斎藤隆夫とオランダのハーグを目指す。日本の代表団は1913（大正2）年9月、アメリカの代表団と日米部会を作り独自の外交を進展させた。日米の親しい関係を議員レベルで促進し、非公式に問題の解決を検討するためである。ヨーロッパからの帰途、アメリカを経由した関和知は、この会議の様子を在米日本人へ報告している。また、ウィルソン大統領に会い、上下両院でも紹介されて、アメリカの政治家との交流に努めた。

関和知はアメリカでの排日問題に楽観的な見通しをもち、特に東海岸における政治家や資本家が排日問題に同情的であることに期待を寄せていた。他方、アメリカの東アジアへの進出については警戒心を抱いている。そして、日米両国民の感情に注目し、その行き違いが誤解を生み出していると考えた。とりわけ、軍人がしばしば首相となる日本の政界が、海外で異様に見られている点を強調した。こうした誤解を解くための感情の操作、すなわち世論の誘導について、関和知はソフトパワーによる外交を念頭に置いていた<sup>(123)</sup>。アメリカへの日本人留學生の減少などを気に向け、非公式な人々の交流が大切であり、それを支えるには日本の政治システムの民主化が欠かせないと感じていた。

一方で、一等国民としての自負は認めており、東洋の覇者になるべきとの考えは譲っていない。

その限界は、ウッドロウ・ウィルソンへの共感にも表れている。関和知はアメリカの参戦を支持し、平和主義がドイツの軍国主義を打破するという構図を描いた。日本に対しては、第二のドイツとならないよう戒め、対外的には人種的な偏見を緩和するよう訴えている。にもかかわらず、シベリア、支那における権益は確保せねばならないという。

その後も、議会において彼は、国体精神のような考えが移民の受け入れを妨げていると指摘し、各種雑誌において、アメリカ人の生活を理解せねばならないと主張した。もちろん、市民権を奪うような法案は行き過ぎであると批判するが、移住する者は日本の感情に固執してはならないという。他方、本国の民主化が進んでいないことが、移民の生活にも影を落としてしていると述べ、日本において言論、集会、労働組合結成の自由が制限されていることを批判した。パリ講和会議やワシントン会議での政府の対応についても、欧米への根回しの不十分さ、欧米人の性質、気風を理解していない点を追及し、東洋風のあいまいな対応ではならないと訴えた。

関和知が所属した憲政会でも、総裁の加藤高明はアメリカ主導の国際秩序を認め、ウィルソンの考えに共感を示したものの、デモクラシーへの対応は漸進的に行わねばならないという態度をとっていた<sup>(124)</sup>。民主化の程度と進捗については多様な意見が存在したが、普通選挙を導入する方向性は不可避となりつつあった。

このように、留学経験はアメリカ人に対する理解や、政治システムの違いを関和知に学ばせ、プラグマティックに政治活動を行う指針を彼に与えた。排日問題に関して、日米議員の交流を実際に行い、在米日本人と意見を交わして、議員として具体的な政治活動を行った。行き過ぎた排日法案を批判する一方、互いの理解を促すことを重視し、長期的な改善を目指した。アメリカの政治は国民の世論に左右され、連邦政府の理解を得るだけでは必ずしも問題は解決しないと関和知は考えた。ただし、こうしたソフトパワーを用いた外交戦略は目前の問題に楽観的であり、また、ウィルソン大統領への共感も、あくまで帝国主義の範囲内に収まる「平和主義」にすぎなかった。

欧州大戦後、列強が民主化を進めるなか、元老が推薦した軍人が首相となる日本の藩閥政治は後れを取っている。のみならず、軍国主義との誤解を欧米人に与え、延いては移民にも悪影響を及ぼす。関和知はそのように考え、日本でもやがて世論が政治を動かす時代が来ると予見し、閥族打破、国民教育、普通選挙の導入を訴え政治活動を展開していく。その軌跡については、別稿にて詳述したとおりである。

## 注

- (1) 藤岡紫朗『歩みの跡——北米大陸日本人開拓物語』歩みの跡刊行後援会, 1957年, 260頁。
- (2) 本田毅彦「海外経験を持つメディア議員たち——東亜同文書院卒業者を中心として」佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員——「政治のメディア化」の歴史社会学』創元社, 2018年, 274頁。
- (3) 若槻泰雄『排日の歴史——アメリカにおける日本人移民』中央公論社, 1972年。
- (4) 箕原俊洋『アメリカの排日運動と日米関係——「排日移民法」はなぜ成立したか』朝日新聞出版, 2016年, 296頁。
- (5) 『排日移民法と日本のマスメディア——近代日本政治資料4』慶應義塾大学法学部政治学科玉井清研究会, 1996年, 『排日移民法と日本のマスメディア・続——近代日本政治資料17』慶應義塾大学法学部政治学科玉井清研究会, 2012年, 玉井研究会「排日移民法と日本のマスメディア」『政治学研究』48号, 2013年。
- (6) 松尾理也『大阪時事新報の研究——「関西ジャーナリズム」と福澤精神』創元社, 2021年, 155-164頁。
- (7) 片山慶隆『日露戦争と新聞——「世界の中の日本」をどう論じたか』講談社, 2009年, 162-173頁。
- (8) 伊東かおり『議員外交の世紀——列国議会同盟と近現代日本』吉田書店, 2022年。
- (9) 関和知「石川照勤師を憶ふ」望洋吟社編『不亡録』望洋吟社, 1925年, 12頁。
- (10) 『新総房』1902年9月24日, 2面。
- (11) 関和一述・関正樹編『関和知物語』私家版, 2000年, 11頁。
- (12) 関白洋「鵬遊余話」『新総房』1903年3月26日, 1面。
- (13) 『新総房』1903年4月23日, 2面。
- (14) 白洋子「鵬遊余話」『新総房』1903年3月19日, 1面。
- (15) 同書, 1面。
- (16) 関和知「忘れ得ぬ三人の友——外国留学中の思出」『中学世界』20巻13号, 1917年, 67頁。
- (17) 同書, 70頁。
- (18) 『新総房』1902年9月24日, 2面。
- (19) 白洋子「鵬遊余話」『新総房』1903年3月20日, 1面。
- (20) 同書, 1面。
- (21) 白洋子「鵬遊余話」『新総房』1903年3月21日, 1面。
- (22) 白洋子「鵬遊余話」『新総房』1903年3月22日, 1面。
- (23) 白洋子「鵬遊余話」『新総房』1903年3月24日, 1面。
- (24) 『新総房』1903年4月24日, 2面。
- (25) 白洋子「鵬遊余話」『新総房』1903年5月15日, 2面。
- (26) 第二次大隈重信政権下の関和知については, 河崎吉紀「学校歴から政治力への転換——大隈重信政権下の副参政官・関和知を例に」『評論・社会科学』136号, 2021年を参照。
- (27) 白洋子「鵬遊余話」『新総房』1903年5月15日, 2面。
- (28) 白洋子「鵬遊余話」『新総房』1903年5月17日, 2面。
- (29) Yale University, 1926, *Alumni Directory of Yale University Living Graduates & Non-graduates*, New Haven: Yale University, p.494.
- (30) 関和知『近代政治の理想と現実』帝国講学会, 1925年, 602頁。
- (31) 『東京朝日新聞』1920年11月24日, 5面。
- (32) 白洋子「米國通信(続)」『新総房』1905年2月21日, 1面。
- (33) 中村春雨「関白洋兄足下」『新総房』1910年8月10日, 1面。
- (34) 中村吉蔵『欧米印象記』春秋社, 1910年, 85頁。
- (35) 同書, 111頁。
- (36) 同書, 111頁。
- (37) 前掲, 関和知「石川照勤師を憶ふ」, 12頁。
- (38) 1906, *Catalogue of Princeton University: 1906-1907*, Princeton, New Jersey: The University, pp. 334-335.

- 39) 1917, *The Japanese Student*, 1: p.85.
- 40) 川合道雄「梁川をめぐる人人——「回覧集」を中心に」『国士舘大学文学部人文学会紀要』17号, 1985年, 135頁。
- 41) 佐藤能丸編「早稲田大学大学史資料センター所蔵「原版写真」目録(1)」『早稲田大学史記要』31巻(通巻35号), 1999年, 234頁。
- 42) 『布哇報知』1915年9月22日, 4面。
- 43) 一宮町教育委員会編『旧斎藤家文書第二次調査報告書』一宮町教育委員会, 2022年, 200頁。
- 44) 『新総房』2号, 1897年。
- 45) 関和知「凄味を帯びた真剣の評論家」涙香会編『黒岩涙香』扶桑社, 1922年, 435頁。
- 46) 白洋「移民問題の障碍」『万朝報』1908年7月28日, 1面。
- 47) 白洋「移民問題の障碍」『万朝報』1908年7月29日, 1面。
- 48) 白洋「移民問題の障碍」『万朝報』1908年7月30日, 1面。
- 49) 白洋「移民問題の障碍」『万朝報』1908年8月1日, 1面。
- 50) 『新世界』1908年5月26日, 1面。
- 51) 『大隈重信関係文書』7巻, みすず書房, 2011年, 106頁。
- 52) 前掲, 関和一述・関正樹編『関和知物語』, 13頁。
- 53) 石橋湛山『石橋湛山全集』第15集, 東洋経済新報社, 2011年, 67頁。
- 54) 『憲政本党党報』3巻7号, 1909年, 29頁。
- 55) 大井胤治『光炎——鼎浦小山東助伝』世界文庫, 1967年, 166頁。
- 56) この時期の関和知については, 河崎吉紀「国民党の若手代議士——関和知と閩族打破」『評論・社会科学』134号, 2020年を参照。
- 57) 『東京朝日新聞』1911年3月20日, 4面。
- 58) 『日米新聞』1913年4月27日, 4面。
- 59) 『紐育新報』1913年4月19日, 4面。
- 60) 『日米』1913年4月12日, 3面。
- 61) 『日米』1913年4月13日, 3面。
- 62) 『新世界』1913年4月17日, 6面。
- 63) 『東京朝日新聞』1913年4月18日, 5面。
- 64) 同書, 4面。
- 65) 『東京朝日新聞』1913年5月8日, 2面。
- 66) 『東京朝日新聞』1913年5月10日, 3面。
- 67) 『東京朝日新聞』1913年5月15日, 3面。
- 68) 『読売新聞』1913年5月23日, 2面。
- 69) 『東京朝日新聞』1913年6月8日, 2面。
- 70) 『東京朝日新聞』1913年6月24日, 3面。
- 71) 前掲, 伊東かおり『議員外交の世紀』, 48-49頁。
- 72) 関白洋「外遊紀行(一)」『青年』1月号, 1914年, 154頁。
- 73) 同書, 155頁。
- 74) 関白洋「外遊紀行(二)」『青年』2月号, 1914年, 95頁。
- 75) 関白洋「外遊紀行(四)」『青年』4月号, 1914年, 105-106頁。
- 76) 同書, 109頁。
- 77) 『早稲田学報』228号, 1914年, 20頁。
- 78) 同書, 20頁。
- 79) 『列国議会同盟並同日本議員団概要』列国議会同盟日本議員団, 1926年, 65頁。
- 80) 前掲, 『早稲田学報』228号, 21頁。
- 81) 1914, *The Interparliamentary Union: Hand Book of the American Group*, Washington: The Group, p.8.
- 82) 『東京朝日新聞』1914年6月28日, 2面。

- (83) 『東京朝日新聞』1913年9月22日, 2面。
- (84) 関和知「前途悲観すべき我国の貿易方針——英国滞在中の印象」『実業之世界』10巻24号, 1913年, 31頁。
- (85) 同書, 32頁。
- (86) 『新世界』1913年6月4日, 6面。
- (87) 『日米』1913年10月22日, 3面。
- (88) 1914, *Carnegie Endowment for International Peace: 1913-1914*, Washington: Carnegie Endowment for International Peace, p.42.
- (89) 『日米』1913年10月22日, 3面。
- (90) 『新世界』1913年10月24日, 3面。
- (91) 『日米』1913年10月28日, 4面。
- (92) 『日布時事』1913年11月5日, 1面。
- (93) 『東京朝日新聞』1913年11月17日, 2面。
- (94) 関和知「感情の理解なき危険極まる国交」『実業之世界』11巻2号, 1914年, 28頁。
- (95) 関和知「新自由主義」『読売新聞』1914年4月7日, 3面。
- (96) 関和知「白館の主人公」『学生』5巻2号, 1914年, 48頁。
- (97) 『青年』3月号, 1914年。
- (98) 『新世界』1914年4月14日, 3面。
- (99) ウイルソン(関和知訳)『新自由主義』勸学社, 1914年, 7頁。
- (100) 同書, 179頁。
- (101) 秋村「ウイルソン大統領と「新自由主義」(関和知氏訳新自由主義を読む)」『東京経済雑誌』69巻1745号, 1914年, 28頁。
- (102) 『国民経済雑誌』17巻1号, 1914年, 155頁。
- (103) 関白洋「国民の覚悟を望む」『警世新報』1915年1月1日, 2面。
- (104) 『新世界』1915年10月12日, 3面。
- (105) 『東京朝日新聞』1918年12月19日, 1面。
- (106) 『東京朝日新聞』1919年1月19日, 1面。
- (107) 『中外』3巻2号, 1919年, 165頁。
- (108) 『帝国文学』25巻3号, 1919年, 136頁。
- (109) 外交研究会編『ウイルソン言行録』止善堂書店, 1919年, 序文1頁。
- (110) 関和知「現代米国の政治家を論じて汎民主主義の将来に及ぶ」『実業之世界』15巻21号, 1918年, 27頁。
- (111) 関和知「如何なる条件を以て媾和は成立すべき乎」『大観』1巻7号, 1918年, 70頁。
- (112) 関和知「講和に対する希望と用意」『青年』6巻10号, 1918年, 9-11頁。
- (113) 関和知「世界の大大勢に順応せよ」『一大帝国』3巻12号, 1918年, 36頁。
- (114) 関和知「政治上の道徳的勝利」『憲政』2巻1号, 1919年, 67頁。
- (115) 「第四十一回帝国議会議院 予算委員第一分科(外務省司法省及文部省所管)会議録(速記)第一回」1919年2月1日, 12頁。
- (116) 関和知「物心両様の修養」『実業之日本』22巻8号, 1919年, 170頁。
- (117) 関和知「米国の政争と排日問題」『太陽』26巻10号, 1920年, 72頁。
- (118) 関和知「米国排日の真因を論じて教育方針の革新に及ぶ」『教育時論』1278号, 1920年, 5頁。
- (119) 「第四十四回帝国議会議院 衆議院議事速記録第十六号」『官報号外』1921年2月20日, 344頁。
- (120) 前掲, 箕原俊洋『アメリカの排日運動と日米関係』, 113頁。
- (121) 関和知「太平洋会議と国民的反省」『教育時論』1309号, 4頁。
- (122) この時期の関和知については, 河崎吉紀「メディア議員の出世——関和知と『新総房』を例に」『京都メディア史研究年報』6号, 2020年を参照。
- (123) 河崎吉紀「閥族打破から国民教育へ——憲政会所属議員・関和知の不安」『評論・社会科学』137号,

2021年, 108頁。

(124) 奈良岡聡智『加藤高明と政党政治——二大政党制への道』山川出版社, 2006年, 210頁。

#### 付記

本研究は JSPS 科研費 20H04482, 21K02289 の助成を受けたものです。

---

The Parliamentarians from the Perspective of a Journalist  
with Experience Studying in the United States:  
Political Activities of SEKI Wachi against  
the Anti-Japan Exclusion Movement

Yoshinori Kawasaki

---

This paper clarifies the activities and ideas of politicians working on the issue of the Anti-Japan Exclusion Movement. To illustrate, we focus on SEKI Wachi, a journalist who earned a degree in the United States and then acted as a lawmaker in the House of Representatives in the 1910s and 20s. Financial poverty forced him to work while studying abroad, giving him an up-close view of the various strata of American society. After returning to Japan, he worked as an editor for the newspapers *Yorozu Choho* and *the Tokyo Mainichi Shimbun*. In 1909, he became a member of the House of Representatives. He organized a consultation meeting with NAKANO Takenaka and others to oppose the California Alien Land Law. In addition, he engaged in other concrete political activities, such as forming the Japanese-American Section in the Inter-Parliamentary Union with American delegates at the 18th Conference. He emphasized that it is important to focus on the emotional differences between the people of the two countries in order to deepen mutual understanding.

**Key words:** Princeton University, Inter-Parliamentary Union, Woodrow Wilson

